

脳卒中の下肢装具 第4版 病態に対応した装具の選択法

渡邊英夫, 平山史朗, 藤崎拓憲・著

【評者】 大串 幹

(兵庫県立リハビリテーション中央病院
リハビリテーション科部長)

医師として、装具処方を行うにあたっては、患者の状態に最も適していて、そして使い続けてもらえる装具の具体的なイメージが浮かびあがってこなければならないと思っている。装具処方の経験がまだ浅い時は、可及的に best をめざし、結局は better などところに落ち着つくのではあるが、先輩医師の処方をまねながら、装具の機能を知ること、患者の身体機能を評価すること、最も使用するシチュエーションに適しているかの検討などのプラクティスを繰り返し、経験値を増やしていくしかない。当時は、文献で数多くの装具があることは知っていても、実物を手に入れることは難しいので、金属支柱・ダブルクレンザックの SLB を基本として、自分なりに使いこなせるプラスチック AFO を1つか2つ持っていればよいとも先輩に諭された気がする。その後、新しい種類の装具を使う機会を一つひとつ得て、処方できる装具の種類が増えていったが、実のところそれが真に better な処方になっていたのかは常に疑問であった。

著者代表の渡邊英夫先生は評者の大学時代の恩師であった。装具療法については、整形外科・リハビリテーション医学で丸々1コマ分の講義があり、歩行サイクルと絡めるなどかなり難しい内容であったと記憶している。しかし同時に、装具や日常の道具を患者の状態に合わせるためのたくさんの「工夫」をされており、装具や道具はそれら単独では「もの」に過ぎないが、患者が装着し使うことで、患者の生活にとって不可欠なもの、身体や生活の一部になることが強く感じられた。評

A5判・216頁
2022年10月
定価：4,620円
(本体4,200円+税)
ISBN978-4-260-05033-3
医学書院 刊



者は患者には今も「装具は装う道具です。眼鏡と同じように使っていただきたい」とお話ししている。

本書は、機能分類に基づく装具の実践使用法事典としての特長を持つ。装具選択において、ある装具の効果を他装具と比較する文献はあっても、機能分類で検索できる百科事典的な文献はなかった。果たして2007年に上梓された本書初版はまさに待ちに待った画期的なもので、これまでの better 処方から best 処方へと導いてくれるハンドブックであった。世界中の多様なデザインの装具・継手を知ることができ、検索だけでなくむしろこの装具を必要とする病態を想像し、いつか役立てたいという野望を抱かせた。このたび、最適な処方をめざし続けている人へ向けての第4版が刊行された。ベスト・フィッティングをめざし続けてこられたのは紛れもなく渡邊先生ご自身ではないだろうか。本書には先生の作られた工夫たっぷりの装具も載せられている。先生は新しい装具には目がなく、強い探求心を持たれていることがわかる。何より版を重ねることに仲間となる臨床の実践者である共著者を得て、先生のノウハウが遺伝子となり、確実に彼らへと受け継がれている。本書を手にするすることで、先生の知識、経験、装具への愛を共著者と同じように受け継ぐことができる。これまででもこれからも工夫によって新しい装具が生まれ、そして消えていく。技術や材料が進化することで装具の形や使い方は変わっていくかもしれないが、本書は今の時代に活かされ活かされた装具の記録として次の世代への贈り物になると信じている。